

8. 爺ヶ岳

1) 日程

1984年12月29日～12月31日（前夜発2泊3日天幕）

2) コース

第1日 鹿島部落—東尾根—キャンプサイト

第2日 キャンプサイト（停滞）

第3日 キャンプサイト—東尾根—天狗尾根—爺ヶ岳—天狗尾根—東尾根—キャンプサイト—鹿島部落

3) 記録

12月29日 ここ数年年末になるとIさんからの年に一度の電話が恒例になっている。年末山行のお誘いである。今年ですでに5年目になるが、Iさんの所属する山の会の年末山行に同行させていただいている。一昨年激しい降雪のため登頂を断念し、昨年再挑戦し、快晴の山頂を踏んだ五竜岳の感激の記憶は新しい。今年は、その同じ後立山の爺ヶ岳ということで、喜んで同行させていただくこととした。

仕事納めを終え、飛んで帰って支度をする。パッキングしてみると個人装備だけなのに結構な重さになる。冬山だからと自らを納得させて出発。夜行列車は、ゆっくり座れ、ウトウトと浅い眠りを繰り返しているうちに上諏訪に着く。

駅の待合室はストーブのすぐ前に座っているにもかかわらず、じわじわと冷えてくる。ザックから上着を出そうかと迷っているうちに、約束の4時になりIさんが車で迎えに来てくれる。1年ぶりの挨拶もそこそこに、車に乗り込んで他のメンバーの家へ。4人が乗って荷物を積むと、車の中はほとんど身動きもできない状態だ。そのまままだ真っ暗な中、R19を松本方面へ。塩尻峠付近から雪が降り始め、峠を越えてドライブインで休憩する頃 やっと夜は空けた。空一面の分厚い雪雲から、絶え間なく雪が落ちてくる。

R19からそれで鹿島部落方面の道に入ると、道脇の積雪量も一段と増え、降雪も心なしか増えてきたように感じる。ほとんど無風で、まさに深々と降り積もる雪の様子が見えるようだ。

登山指導所に着き、まず身支度を整える。最初の仕事は、スコップを借りて雪かきだ。道路脇の空き地を除雪して駐車スペースを確保する。ひと働きした後、指導書で冷たい野沢菜と熱いお茶をいただき人心地ついたところで、装備を分配し、登山計画書を提出して、いよいよ山へ。

指導書の裏から尾根に取り付く。道は一応踏まれてはいるが、積雪は歩き始めからかなりなものだ。ほとんどまっすぐ登るようなので、急な斜面では木の枝につかまるようにして登る。林の中を登っていくが、木々はほとんど葉を落としているので、積

もった雪とあいまって明るい雰囲気だ。小一時間ほどの急なのぼりの末、尾根筋に出る。ここからは、尾根に沿って登っていく。小さなピークをいくつか越えながら、だんだん高度を増していく。所々樹林が途切れるが、降雪が激しく今越えてきた尾根すらかすんで、ぼんやりと輪郭が見えるだけだ。それに音がない。話し声すら口から出た途端プツンと途切れて、無音の世界になってしまう。雪のせいか気温はさほど低くなく、カッターシャツだけなのに汗が出る。シャツの背中が汗でぬれ、それが外側に広がると、今度は逆に外側から凍り始める。また 解けた雪が再び凍って髪の毛がゴワゴワになる。

白い世界の白い尾根をただ黙々と登っていく。みんなあまり言葉もなく、そろそろ疲れてきたかなと思い始めた頃、キャンプ予定地に着く。といっても尾根が少し広くなっているだけの所で、適当な平地を見つけて雪を踏み固めてテントを張る。荷物の整理をし、足から引き剥がすように登山靴を脱いでテントに転がり込むと、そこは天国だ。ガスコンロを1つ点けただけでテントの中は暑いくらいで、やっと落ち着いた気分になり、体のだるさが気持ちよいとすら感じる。夕食を腹いっぱい食べ、アルコールを充填すると元気も回復する。雪は心配だが、それは様子を見るしかないということで、今日は寝ることとなる。雪のせいか気温もあまり下がらず、よく眠れた。

12月30日 起きてみると雪は激しく降り続いていた。無理して登っても ということで、今日は停滞となる。他のパーティーもほとんど動かないようだ。テントの中でゴロゴロしているのにも飽き、雪洞を掘ったりしてテントの周りで遊ぶ。少し先まで行ってみるが、昼になっても薄暗いほどの雪の降りだ。風もなくただ降り続く雪は、かえって不気味な雰囲気だ。昨日までのトレースも完全に埋まってしまっていた。これでは一昨年同様、爺ヶ岳も2年越しになるのかなと思う。と言っても全ては自然任せで人知の及ぶところではない。明日は何とかと願うだけだ。

12月31日 相変わらず雪は降り続いていたが、サラリーマン登山？ということで日程のない人もおり、今日は行けるところまで行ってみるということで出発する。トレースは全くなく膝までのラッセルとなり、15～20分交代で進む。ガレ場の細い尾根が、風もなく降りしきる雪の中、白く一筋にのびている。まるで水墨画の世界に踏み込んだようだ。このコース唯一の危険箇所ということで、一応ザイルをつけて一人ずつ通過。再び単調なラッセル作業を繰り返す。何度目かの自分の番になったとき、突然雪の壁に行き当たる。まっすぐ登るしかないのだが、傾斜がきつい上吹き溜まりとなっているのか、腰まで雪に埋まって前に進めない。初めはどうしてよいか解らず雪の中でもがいているだけのような状態だったが、そのうち少し要領がつかめてくる。頭の高さの雪をピッケルを持った両腕で崩し、胸の前にたまった雪を左右に掻き分け、一歩前進して足元を踏み固める。この遅々とした歩をただひたすら繰り返す

こと30分近く、やっと雪の海を泳ぎきった。何とかこのパーティーの最年少者（30歳ですが・・・）の責任を果たした気分次の人と交代するが、実際は数十メートル進んだだけだった。一段登りきって天狗尾根となったところからは、風が出始め雪が少なくなる。ここからが本格的な雪山の世界か、登るにつれ風が強くなり、雪がしまってきてアイゼンが効果を発揮し始める。幸いなことに風のせい結構先まで見通すことができ、コースを見誤る心配はなかった。尾根の上に出てからは、風も強く休める場所などなく山頂まで一気に上る。山頂付近はまた格段と風が強まり、まともに立ち上がることができない。何とかみんな山頂に這いつくばるように集まり、写真を一撮ただけですぐ下り始める。今度は風に押されるように下っていく。何組かの登ってくるパーティーとすれ違うが、今日は、われわれのパーティーが一番先に登ったということのようだった。朝 必死に登った吹き溜まりの急斜面も、すっかり踏み固められ歩き易そうになっていた。そこを崩さないようにと脇の雪に踏み込んだ途端、雪ごと崩れ落ちそうになりヒヤリとしたが、ピッケルを深く差し込んで何とか踏みとどまりホッとした。ここからはまた無風の中ゆっくりと下っていく。ガレ場の尾根のところは、少し明るくなったせいか、朝のような幽玄な雰囲気はすでになかったが、危険箇所には変わりなく慎重に下る。

テントまで戻ると、一安心とともに、1分いたかいなかったかの山頂ではあったが、今年もまた雪の山に登ることができたという満足感がじわじわと湧いてくる。このままここにもう一泊して新年を迎えるというのも、かなり魅力的な思いつきのように思えたのですが、今日中に降りたいという意見に従い、一杯の祝杯だけで我慢して撤収ということになったのでした。他の会社の山岳部の冬山合宿に参加させていただいている私としてはなんとも言えませんが、社会人の山歩きのゆとりのなさということも垣間見えたのでした。

ここからは、再び重い荷物を背負いただただ下っていく。尾根から逸れて登山口へ向けて下り始めた頃には、雪も上がり、登山指導所についたときには、薄日も差し始め、無事戻ってこれた安堵感とともにザックをおろしました。そして登山靴を脱ぐ前の最後の仕事、車の掘り起こし作業にスコップを持って向かった。